

JOMF 派遣医師便り (2016. 1)

◆マニラ◆

クリスマス飾りのないクリスマスイブ

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

2015年12月24日にマニラのトンド地区へ妻と二人で行きました。ごみの最終集積場が近くにあり、テントやベニヤ板で作られた家々が立ち並んでいました。大きなトラックが何台も駐車している道路沿いに、小さな家々の立ち並ぶ路地につながる入口がありました。入口周辺には数人の男女がいて私たちをじっと見ていました。その人たちに「路地の中へ入ってよいか、生活環境について話を聞かせてくれないか」尋ねると、彼らは歓迎してくれました。路地の入口を入ると狭い道の両脇に50mほど連なる家々が隙間無くびっしり立ち並び、空中には数十本の電線が成人の背丈くらいの高さで弧をなして束になってぶら下がっていました。家々の玄関前ではプラスチックのバケツに水を汲んで母親が子供の体を洗ったり洗濯をしていました。

奥の方まで歩いていくと40才くらいの母親が私たちのほうに近づいてきて「あなた達はミSSIONナリーか？」と尋ねてきました。「私たちは日本人で医療従事者です」と伝えました。子供が2人いるその母親は、自分たちの生活について話をしてくれました。夫の父親（つまり彼女の義父）は日本人であること、その男性は長期間マニラに居たが今は日本へ帰国してしまったこと、町の保健担当の人が定期的に訪問し援助してくれているが家賃を支払うと生活が厳しくなり、更に電気代を支払うと生活できなくなると話していました。またその地区では12月になってから発熱・下痢症の患者が急増し、昨夜も子供3人が近くの病院へ救急車で搬送されたとのことでした。

小さな子供たちがたくさん集まってきましたが、みな恥ずかしそうで、初めは遠慮がちでした。みかんやケーキなどをプレゼントし子供たちとささやかなクリスマスイブを過ごしました。集まってくれた子供たちの屈託のない笑顔は私たちにとって輝く星のようなクリスマスプレゼントでした。

帰り道に、昨夜子供たちが救急車で搬送されたという病院を訪問しました。病院入口では止まっているトライシクルの中で子供たちがコの字型に寝ていました。院内では道に面したドアの無い部屋で椅子に座った状態で点滴を受けている人もいました。

病院を出ると、上半身裸で痩せ細った男性が道端に横たわっていました。髪の毛は50cmくらい伸びきり、長期間体も洗っていない様子です。消耗し疲れ切っているよううつろな表情をしていました。妻が「大丈夫ですか」と尋ねると手を挙げて、“大丈夫だ”と親指

で OK サインを示し手を振りました。渡したチョコレートをむさぼるように食べていました。暖かい目の奥に寂しさと悲しみが見えました。

イントラムロスから川一つ隔てただけの地域ですが、豪華ショッピングセンターが立ち並ぶマカティの華やかなクリスマスとは大きく異なるトンドの“飾りのないクリスマスイブ”でした。

(2016年1月11日記)